

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：32702

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720269

研究課題名(和文) L2セルフシステム理論を応用した英語学習動機を高める要因の質的・量的研究

研究課題名(英文) L2 Self-System and Factors Affecting English Learning Motivation: A Qualitative and Quantitative Study

研究代表者

菊地 恵太(KIKUCHI, KEITA)

神奈川大学・外国語学部・准教授

研究者番号：20434350

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、大学英語教育の中でどのような要因が学習者の英語学習の意欲を高める要因になっているかを質的・量的アプローチを用いて、調査することであった。本研究によって、L2セルフシステムの理想自己、義務自己、英語学習経験の三要素の中で特に理想自己を持つことの重要性が改めて認識された。また、なんとなくこうなりたいといったあいまいな理想自己をもっているにもかかわらず学習行動と結びつかないといった学習者の実態も質的分析の結果から理解できた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to identify the factors that increase the motivation of English learners who study at the tertiary level in Japan. This research focused on the learners' L2 self-systems (Ideal L2 self, Ought-to L2 self, and L2 Experience). In short, the results of the study using both qualitative and quantitative methods indicated that having a clear ideal L2 self is important in maintaining learner motivation. Based on the qualitative analysis of the interview data, it was found that many learners have a hard time motivating themselves if they have only a vague ideal self.

研究分野：外国語教育

キーワード：動機付け

## 1. 研究開始当初の背景

英語学習の学習者の動機付けに関する研究は国内でもかなり進んでいる。従来の統合的動機・道具的動機に関する研究から、帰属理論、自己効力感理論、自己価値理論、目標理論、自己決定理論など海外の様々な理論に基づいた研究がされ、近年では、特に海外での研究で構築された動機付け構造のモデルに基づき、多くの研究者が学習者の動機付けはどのように行えばよいか、様々なコンテキストで研究がすすめられている。

また昨今では、認知心理学の知見も取り入れ、既存の理論の集約を試みた L2 セルフ・システム理論(Dörnyei, 2005)が注目されており、外国語(L2)を学ぶ上での学習動機の要因は、理想自己(こうありたいという自分)、義務自己(こうなるべきだという自分)、学習経験(学習者の外国語学習経験)の3要素を軸に学習者の動機付け構造を捉えようとしている。この理論は従来の内的動機付け、外的動機付け、統合的動機付けといった要素を新しい角度から捉えたもので特に外国語学習者の動機付け構造を分析するための理論として国内外で盛んに研究者が取り入れられている。

なお、筆者の携わった最近の大学英語教育でのコミュニケーションを目的とした英語教育における学習動機減退要因に関する調査(Kikuchi, 2011)の中でも動機の高い学習者と低い学習者では学習動機減退要因の構造に違いが大きく見られることが確認された。端的に述べると、授業内・授業外の学習動機を高める要因の欠如により様々な学習者がただ単位を取得するために必修英語の授業を受けるといった受身の姿勢になってきているといったこともわかった。

そういった背景を踏まえ、本研究では、英語学習動機の高揚・減退要因を L2 システム理論を軸に調査するという研究テーマの着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究の主目的は、質的・量的の2つのアプローチを用いて大学での英語教育の中でどのような要因が英語学習に対しての学習動機を高める要因となっているかを調査することである。そのための理論的枠組みとして の冒頭で述べた L2 セルフ・システム理論を応用し様々な専攻の学生がどのような理想自己、義務自己、英語学習経験をもっていかをまず調査する。その上で様々な学習動機構造を持った学習者の学習動機を高めるためにどのような指導が有効かを調査する。

## 3. 研究の方法

英語科目を履修中の学習者(大学1・2年生)を対象とした聞き取り調査、アンケート調査を中心に、様々な英語授業の授業観察、

すでに必修科目として英語を学んだ経験のある学習者(大学3・4年生)を対象とした聞き取り、アンケート調査を行った。また、最終年度の2015年度には、国内の国公立・私立大学に通う約800名の1年生を対象に大規模調査を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 研究成果のまとめ

本研究の主な成果としては、まず L2 セルフシステムの3要素(L2理想自己・義務自己・学習経験)を軸にした質問紙の開発があげられる。今まで L2 セルフシステムに関しての質問紙には Taguchi, Magid, and Papi(2009)に基づいた40項目を超えるものが存在したが、今回の研究で項目を精査し、29項目の質問紙を作成した。最終年度には、800名ほどの大学1年生を対象にした調査を行い、現在論文投稿準備中である。論文の出版をもって開発した質問紙は公開予定である。

次に特筆すべきは、大学1年次生の前期開始時から後期終了時までのモチベーションの変化に関しての傾向に関しての調査結果である。こちらの結果の一部は、Kikuchi(2015)にまとめ、出版した。2大学において医学部看護学科、教養学部国際学科、外国語学部国際文化交流学科・中国語学科に在籍する1年次生10名に1か月に1回のペースでインタビューと質問紙調査への参加をお願いし、質的・量的分析を行った結果、特に夏休みといった長期休暇の後、学習意欲をとりもどすことが難しいこと、また5月末から6月初め、10月末から11月初めといったいわゆる「中だるみ」をほとんどの学習者が経験するが、その後、アドバイスをくれる先輩といった「重要な他者」や「留学」といった目標を見つけられた学習者は学習意欲を維持するものの、そうでない学習者は単位取得のためといった外的動機づけ要因以外には学習意欲を高めるきっかけを見いだせない学習者が多いことがわかった。

また、学習意欲に影響を与える学習経験に関してインタビューで特に詳細に調査をしたが、授業外で課題をこなすといった最低限の活動はするもののアルバイトやサークル活動・部活動、友人との時間を優先し、英語学習に目を向けることはなかなかないといった大学生の実態が改めてわかった。

現場での指導に生かすうえでは、そういった大学生の現状を理解し、授業内での活動をより充実させ、退屈させないような工夫をする一方、授業外に課す課題とのバランスを配慮すべきだということが理解できた。例えば、ある研究参加者は「課題が出ていなければ、大学での時間はアルバイトで疲れている自分にとっての安らぎの時間である」と表現していた。またライティング課題は時間がかかるうえ、パソコンを使ってタイプしなければいけないのが大変であるという学習者もいた。そういった学習者の実態を配慮すると

あまりにも多くの課題を出す学習動機  
減退要因となってしまうであろう。また最近  
は、スマートフォンに依存しているため、パ  
ソコンを家に持っていない学生も多いよう  
で授業外課題を出すときに配慮が必要であ  
ることも示唆された。

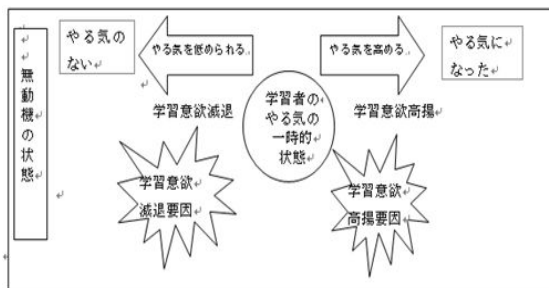


図1 学習意欲減退要因の概念と学習意欲を高める要因との関連性 (Kikuchi, 2014)。

さて、ここで、いままでに述べてきた研究  
成果を、Kikuchi(2014)に基づいた以上の図  
で整理してみる。図の中央に円で描いたのが  
学習者のやる気の一時的状態(learner's  
state of motivation)である。学習者は学習  
意欲を高めるような高揚要因(motivators)  
を経験し、やる気が高まり、(motivating)、  
やる気になった状態(Motivated)になるこ  
とがある一方、学習意欲減退要因  
(demotivators)を経験し、やる気が低められ  
(demotivating)、やる気のない状態  
(demotivated)になることもある。なかには  
無動機といわれるやる気が全くない状態  
(amotivation)に陥る学習者もいるであ  
らう。本研究の中で学習者は生活の中で、様  
々な学習意欲高揚要因や減退要因となりうる  
経験をするものの、実際、学習意欲を変化さ  
せるようなことはなかなかないことが示唆さ  
れた。

本研究では、このうちの学習意欲を高める  
ような高揚要因と学習意欲減退要因  
(demotivators)に関して特に注目をして調  
査を行った。量的・質的調査の双方のうち、  
特に質的分析の中で、一時的に高揚要因・減  
退要因を経験するものの留学などの具体的  
な目的がないほとんどの学習者の場合、学習  
意欲を維持することは難しいことがわかっ  
た。例えば、研究参加者の一人は、このよう  
に自分の英語の学習意欲を表現していた。  
いつか海外旅行に行った際に英語を使って  
話してみたいと思うが、街中で英語で話  
している人を見ても別に自分はそうなりた  
いとは思わない、将来、英語の資格試験の  
ために勉強をする必要があるかもしれない  
が、今は英語に対して強い必要性を感じな  
い、締め切りが何かがあったら勉強をする  
かもしれないけれど、今はそれが無いなど  
の発言は英語学習に対してのモチベーシ  
ョンがないともとれるが、彼女はテストで  
よい点をとることは重要だと思っている、テ  
ストによってモチベーションが高められる  
とも言っていた。

## (2) 今後の研究への示唆

今回の研究を通して、今後の研究への以下  
のような課題が見いだされた。まず、今まで  
の学習意欲高揚要因・減退要因の研究は「授  
業内での学習意欲減退要因」といった限定の  
仕方はしてきた。しかしながら、その要因に  
関する、場面に応じた認知の仕方と学習者の  
特性との関連といった、異なったレベルの要  
因を細かく分けずに研究をしてきたといえ  
るであろう。例えば、英語を「話す」こと  
に対してはモチベーションが高いが、英語を  
「読む」というと興味がわかず、そのことか  
ら学習意欲減退を認識してしまうというこ  
とがあるとする。この場合、学習者の学習意  
欲減退要因は、学習者の特性やある領域に対  
するモチベーションが関連していると考えら  
れる。本研究結果をまとめていくうえで、  
今後は、そういった関連性を整理する必要が  
あると考える。

また、複数の研究者たちが、動機づけには  
少なくとも幾つかの階層やレベルがあると  
捉えている(Vallerand, 1995, 1997; 鹿毛,  
2004, 2013; 速水, 1998)。鹿毛(2013)によ  
ると、その水準には、(1) 特定の場面や領域  
を超えた個人の性格の一部として機能する  
特性レベル、(2) 学習している分野や領域に  
反応する領域レベル、(3) 学習時のその場、  
そのときに応じて変化する状態レベルの  
3レベルが考えられるという。この動機にお  
ける三水準モデルを応用することによって、  
より整理されたわかりやすい研究がすす  
められると考えられる。面白い活動をして  
いるときに、時間を忘れて没頭するという  
経験は誰もがしているであろう。その逆に、  
退屈な作業の繰り返しは、状態レベルの  
学習意欲減退要因といえる。人と話すの  
が好きな学習者は、そういった活動が多  
い授業によってモチベーションが高まる  
一方、人と話すことが苦手であれば、そ  
れは学習意欲減退要因となる。そんなレ  
ベルは、領域レベルと考えられよう。ま  
た、何事にも好奇心が高い性格の学習  
者ならば、普段日常使わない外国語に興  
味を持つかもしれないが、基本的に忍  
耐力があまりない学習者であれば根気  
や努力が必要な外国語学習には向か  
ないかも知れない。

今回の研究を通して L2 セルフシステム理  
論にこういった三水準モデルを取り入れ、  
学習活動を行っている際の状態レベル、  
学習分野や領域に関してのレベル、個  
人の特性レベルの3つのレベルで学習  
意欲を高めるような高揚要因と学習  
意欲減退要因を整理することの有  
用性が理解できた。今後の研究を進  
めていくうえで有益であった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Keita Kikuchi

Reexamining demotivators and motivators: A longitudinal study of Japanese freshmen's dynamic system in an EFL context

Innovation in Language Learning and Teaching 査読あり 2015

〔学会発表〕(計 6 件)

Keita Kikuchi

Surveying Japanese learners of English: how can we measure their motivation?

RELC International Conference 2016

RELC, Singapore 2016年3月15日

Keita Kikuchi

Emotions in language learning: What teachers should know. (招待講演)

JALT Fukuoka Chapter Meeting

アクロス福岡, 2016年2月27日

Keita Kikuchi

Motivational Dynamics: What to consider in EFL contexts

Hawaii TESOL 2016, Kapiolani Community College, Honolulu, HI, USA

2016年2月13日

Keita Kikuchi

Where do studies of demotivators fit in SLA research?

ELLTA Meetings, Centre of Applied Linguistics University of Warwick, UK.

2014年3月12日

Keita Kikuchi

Student voices: What does motivation mean? JALT 2013 神戸コンベンションセンター, 神戸市 2013年10月26日

Keita Kikuchi

Insights from a Mixed-Method Study: What does 'motivation' mean?

Hawaii TESOL 2013 Conference

University of Hawaii, Hilo, USA

2013年2月16日

〔図書〕(計 2 件)

- 1) 著者: Keita Kikuchi  
書名: Demotivation in Second Language Acquisition: Insights from Japan 単著  
Multilingual Matters, 2015, 全 161 頁
- 2) 著者: 菊地恵太  
書名: 英語学習動機の減退要因の探求-日本人学習者の調査を中心に, ひつじ書房  
2015, 全 131 頁 単著

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊地 恵太 (KIKUCHI KEITA)

神奈川大学 外国語学部 准教授

研究者番号: 20434350